十文字学園女子大学人間生活学部紀要第８巻　2010年

原著

友人関係の初期分化の維持とその規定因

A study on the maintenance process of early differentiation of relatedness

風間　文明
Fumiaki KAZAMA

本研究の目的は、関係性の初期分化現象が生じていることを確認すること、初期分化した友人関係が長期的に維持されるか否かを確かめること、初期分化の維持過程とその規定因を明らかにすることである。女子大学１年生92名と３年生68名（４年生５名を含む）を対象に質問紙調査を実施した。調査では、入学後１ヶ月時点での最も親しかった友人を想起してもらい、一緒にとった行動、親密度、コミットメントなどを問い、さらに現在の最も親しい友人を尋ねた。分析の結果、以下のことが明らかになった。１年生、３年生とも、入学後１ヶ月時点での親密度が高い群の方が低い群よりも現在の親密度が高く、初期分化現象が生じていた。しかし、入学後１ヶ月時点と現在の最も親しい友人が同一人物であるか否かを検討したところ、１年生では７割以上が同一人物だったが、３年生では６割以上が別人物であり、初期分化した親しい関係が３年生までの長期間にわたっては維持されにくいことがわかった。パス解析からは、まず一緒に行動することで相手との間に自己開示を含むコミュニケーション行動がとられ、それによって相手に対するサービスやサポート行動、情緒的なつながりを表す行動が増え、相手への親密感が高まる。そして一度親密な関係が形成されると、それを維持しようというコミットメントが高まり、その後も親密感が維持され、その結果として初期分化した親密な友人関係が維持される、という初期分化の維持過程が明らかにされた。ただし、１年生と３年生の維持過程に違いがみられ、１年生ではコミットメント以外に初期の親密度が現在の親密度を直接高めていたのに対して、３年生ではコミットメントが高まることによってのみ現在の親密度が高められていた。よってコミットメントが初期分化の長期的な維持を規定しているといえる。

目　的

対人関係の親密化過程を説明するモデルに、Altman & Taylor（1973）の社会的浸透理論がある。この理論は自己開示（Jourard, 1971）を中心概念として、人と人とが相互作用を繰り返しながら、親しい関係を進展させていくプロセスをモデル化したものである。このモデルによれば、

十文字学園女子大学人間生活学部人間発達心理学科
Department of Human Developmental Psychology, Faculty of Human Life, Jumonji University
キーワード：初期分化現象　友人関係　親密化　コミットメント

対人関係の初期には狭い領域について表面的な自己開示が相互に行われ、親しさが増してくるにつれて、より話題の領域が広がるとともに、より内面的な自己開示が行われるようになる。つまり、自己開示をすることで関係が進展するし、関係がより親しくなることで自己開示がより広く、深くなっていくという両者の間に相互規定的な関係が成立していることを仮定している。そしてこの理論では、対人関係が親密化していく過程を、時間経過に伴って徐々に変化していくものととらえている。

Levinger & Snoek（1972）も同様に対人関係の親密化過程を漸進的なものととらえたモデルを提唱している。そこでは2者関係の進展段階が以下の4つのレベルに分けられている。レベル0［無接触の段階］：まだ2人の人物が無関係な状態、レベル1［一方的覚知の段階］：一方の人物が他方の人物の存在に気づく段階で、まだ相互作用は無い状態、レベル2［表面的接触の段階］：二者間に相互作用が始まる段階で、挨拶や世間話など儀礼的な相互作用を中心にした状態、レベル3［相互性の段階］：二者の関係がある程度進展して相互作用が持続的に行われるようになることで、相互に情報が共有され、親しい関係が形成されていく段階で、最終的に二人が一体感を持った状態に至る。さらにこのモデルでは、各進展段階で、親密化を促進するのに寄与する対人魅力の要因が、例えばレベル1では外見的魅力の要因、レベル2では態度の類似性の要因、といった具合に異なっていることを指摘している。この対人関係の発展モデルも、親密化過程を、見知らぬ他者同士が出会って、様々な対人魅力要因の影響を受けながら徐々に親しい関係へと移行していく段階的な過程としてとらえたものである。

社会的浸透理論やLevinger & Snoek（1972）の対人関係の発展モデルのように、対人関係の親密化を漸進的な過程ととらえ、親密な関係になる相手が時間経過と共に徐々に決定されていくと考える立場を「段階的分化説」と呼ぶ。それに対して、親密な関係になる相手は、出会ってから間もない初期の段階において決定されると考える「初期分化説」と呼ばれる立場がある。

Berg & McQuinn（1986）は、交際を始めて間もないカップルを対象に縦断的調査を行った。その結果、約4ヶ月後に交際が続いていたカップルの方が、交際が中止されたカップルよりも始めの調査時点での愛情の程度や自己開示量が高く、4ヶ月時点での交際の維持－中止を、交際開始時点でのそれらの変数で予測できることを示した。山中（1994）は、大学生の同性の友人関係について、出会ってから1週間後、2週間後、4週間後、2ヶ月半後の時点での関係親密度を測定し、少なくとも2ヶ月半後の関係の親密度は，出会ってから2週間後には決定される可能性を示した。この研究は、出会ってから2週間という極めて早い時期に初期分化が起こることを明確にしている。

山中（1994）では初期分化現象が起こる時期の「早さ」に焦点をあてていたため、調査期間が大学入学後1週間から1年次の6月までと短かく設定されていた。しかし、初期分化現象に関しては、初期分化した友人関係がどの程度の長期に渡って維持されていくのかも検討する必要がある。大学生活は4年間という長期間である。その間には、さらに多くの友人と出会う機会や生活環境の変化などが起こり得るため、友人関係が変化することは十分に考えられる。例えば、渡邉・今川（2008）では、大学に入学してから知り合った友人で一番親しい同性の友人を、大学入学後3週間後と2ヶ月後、7ヶ月後と1年1ヶ月後について調査した。3週間後と2ヶ月後、7ヶ月後と1年1ヶ月後をそれぞれ比較すると、115名中53名、115名中49名が異なる友人を選択することが示された。すなわち、長期に渡る大学在学期間においては初期分化した親密な関係が維持されない可能性が考えられる。本研究では、まず第一に、関係の初期分化現象が生じていることを確認する。そ

の上で初期の親密な関係がどのくらいの期間に渡って維持されるのかを明らかにすることを目的とする。

対人関係の進展を説明するモデルとして段階的分化説と初期分化説は、相矛盾するモデルというわけではなく、条件によって両方の過程があり得ると考えられている。山中（1996）は、初期分化を促進する条件として、出会い直後に自己紹介の機会があったこと、「一目見ればその人の人となりはわかる」という対人判断に関する信念を持っていること、コミットメント、サブグループ間での移動可能性が低いこと、集団への適応を早く図ろうとすることを挙げている。この内、コミットメントとは、ある人物との関係を維持していこうという意思を意味し、コミットメントの高まりが初期分化を促進することが予想される。

本研究では、初期分化を促進する条件の内、自己紹介の機会とコミットメントを取り上げ、それに加えて関係初期の相手との行動頻度と親密度の各変数が、現在の親密度と初期分化の維持にどのような影響を及ぼしているかを検討する。それによって初期分化の維持過程とその規定因を明らかにすることが本研究の今一つの目的である。

方　法

調査対象者　埼玉県内の私立女子大学生160名（平均年齢19.6歳、*SD* ＝1.1）を調査対象者とした。学年の内訳は、1年生92名、3年生63名、4年生5名であった。

調査内容　まず調査対象者に、“大学入学後1ヶ月時点で、最もよく行動を共にしていた学科内の友人”を1名想起してもらい、イニシャルの記入を求めた。この友人との、入学後1ヶ月時点での関係について、以下の質問項目に回答を求めた。①入学1ヶ月時の友人と入学当時に一緒にとった行動：和田・廣岡・林（1986）の友人関係行動チェックリストを使用した。共行動（companionship）、コミュニケーション（communication）、相互支援（consideration）、情愛（affection）の4領域の行動から構成されているもので、共行動は「一緒に昼食をとった」、「一緒にコンサートや映画に行った」など、活動や経験を共有する行動、コミュニケーションは、「将来の夢について話した」、「家族のことを話した」など、自分に関する情報を開示したり、話し合ったりする行動、相互支援は、「頼み事を引き受けた」、「お金や物を借りた」、「落ち込んでいたとき慰めようとした」など、友人に対するサービスやサポート行動、情愛は、「相手のしたいことを大いに賞賛した」、「互いに悪ふざけしあった」など、相手との情緒的なつながりを表す行動を、それぞれ意味する。項目数は、共行動とコミュニケーションがそれぞれ12項目、相互支援が9項目、情愛が8項目であった。これら計41項目について、入学1ヶ月時点において、友人と一緒にその行動をとったことがあるかないかについて二件法で回答を求めた。②入学1ヶ月時点での関係の親密さ：山中（1994）による好意度、関係関与度、関係のラベリングの3項目を元にした質問項目を設定した。好意度については、入学1ヶ月時の友人に対して「どの程度好感を持っていたか」を尋ね、「1：全く好感を持っていなかった」から「7：非常に好感を持っていた」までの7件法で回答を求めた。関係関与度については、「どの程度深く関わっていたか」を尋ね、「1：全く深く関わっていなかった」から「7：非常に深く関わっていた」までの7件法で回答を求めた。関係のラベリングについては、親友との関係を表す言葉として、「1：顔や名前を知っている程度の友人」、「2：会えば話をする程度の友人」、「3：特別親しいわけではない学科内の友人の一人」」、「4：ある程度親しい友人」、「5：かなり親しい友人」、「6：親友と呼べるくらい最も親しい友人」の6つの選択肢から選択を求めた。③出会ったときの自己紹介の機会：入学1ヶ月時の友人に対して、「出会ってから間もない時期に、十分に自己紹介をする機会があったか」を尋ね、「1：全く

自己紹介をしなかった」から「4：詳しい自己紹介をした」までの4件法で回答を求めた。④入学1ヶ月時点でのコミットメント：入学1ヶ月時の友人について、「友人関係を維持していきたいと思ったか」を尋ね、「1：全くそう思っていなかった」から「7：非常にそう思っていた」までの7件法で回答を求めた。

上記の質問に続いて、同じ友人との「現在」の関係に関して、上記の③を除く以下の各質問に回答を求めた。⑤最近、1ヶ月の間に一緒にとった行動：①と同様に和田ら（1986）による友人関係行動チェックリストを使用し、最近1ヶ月の間に、友人と一緒にそれらの行動をとったことがあるかないかを尋ねた。⑥現在の関係親密度：②と同様の3項目を使用して、友人との現在の関係について尋ねた。⑦現在のコミットメント：④と同様の質問を使用して、現在の友人との関係について尋ねた。

次に、“現在、最も親しくしていて行動を共にしている学科内の友人”を1名想起してもらい、イニシャルの記入を求めた。この現在の友人について、以下の質問に回答を求めた。⑧親しい友人の異同：先に想起した入学1ヶ月時の友人と現在親しい友人とが同一人物かそうでないかを尋ねた。同一人物でなかった場合、さらに以下の質問に回答を求めた。⑨入学1ヶ月時の友人との現在の関係：入学1ヶ月時の友人との現在の関係がどのようなものかについて、「1：親友というほどではないが、親しい友人の一人」、「2：一緒に遊んだり、行動したりする複数の友人の中の一人」、「3：会えば話はするが、行動を共にしたりすることはない関係」、「4：あいさつをする程度で、どちらかというと疎遠な関係」、「5：ほとんど口をきかず互いに無関心」、「6：どちらかというと仲がよくない」の6つの選択肢から1つ選択を求めた。⑩関係の変化時期：入学1ヶ月時点の友人との関係が現在の関係に変わった時期が、何年生の何月頃か、記述を求めた。⑪関係変化の理由：入学1ヶ月時点の友人との関係が現在の関係に変わった理由を、「1：一緒の授業が少なくなるなど、顔を合わす機会が減ったから」、「2：趣味や考えが自分とは違うと思ったから」、「3：性格が合わないと思ったから」、「4：Aさん以上に気が合う友人が出来たから」、「5：けんかをしたから」、「6：自分にはその気はなかったが、相手の方から距離をとるようになったから」、「7：なんとなく今のようになっていった」に「8：その他」を加えた8つの選択肢から、あてはまるものを全て選択するよう求めた。なお、その他に「対人関係についての信念」、「大学での集団の移動可能性」、「集団への適応」についての質問項目も設定されていたが、項目に不備があったため、分析対象からは除外した。

以上の質問項目に性別、年齢、学年を尋ねるフェイスシートを付した。

調査実施時期と調査方法　2008年11月中旬に、授業時間の一部を用いて集団実施した。

結　果

入学時の親密さと現在の親密さ

入学1ヶ月時の友人との関係の親密さの指標として，好意度，関係関与度，関係のラベリングの3項目の平均評定値を算出した。3項目の標準化α係数は、入学後1ヶ月時点については$\alpha=.73$、現在については$\alpha=.87$と、十分に高い値が得られた。入学1ヶ月時の親密度と現在の親密度との相関係数を求めたところ、有意な正の相関がみられた（$r=.48$, $p<.001$）。入学1ヶ月時に親密であった友人ほど現在も親密であることが示された。

入学後1ヶ月時の親密度が現在の親密度に及ぼす影響を検討するために、入学後1ヶ月時の親密度得点の中央値を基準として、中央値以上を入学後1ヶ月時の親密度高群、中央値未満を入学後1ヶ月時の親密度低群とした。学年については、4年生は5名と少数であったため3年生の中に含め、1年生と3年生とし、学年ごとに入学後1ヶ月時

の親密度高低群の現在の親密度の平均値を算出した（図1）。学年（1年・3年）×入学後1ヶ月時の親密度（高・低）の二要因分散分析を行った結果、学年の主効果（F (1,155)＝8.64, p <.01）と入学後1ヶ月時の親密度の主効果（F (1,155)＝25.02, p <.001）が有意であった。3年生よりも1年生の方が現在の親密度が高いこと、学年によらず入学後1ヶ月時の親密度高群の方が低群よりも現在の親密度が高いことが示された。これらの結果から、入学後1ヶ月時点での親密度の高さが、3年次までの親密度を高めていると考えられ、関係性に初期分化が生じていることが示唆された。

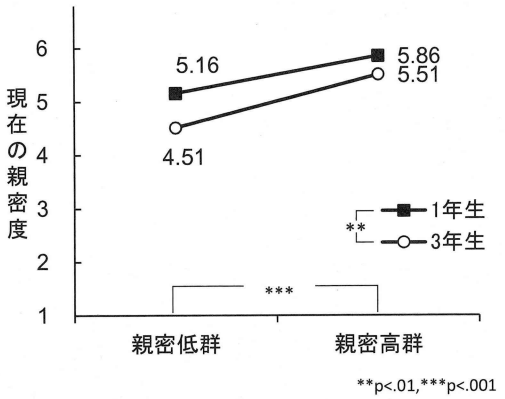

図1　入学後1ヶ月時の親密度高低群ごとの現在の親密度

入学時と現在の親しい友人の一致・不一致

親しい関係の初期分化が、どのくらいの期間維持されるのかを検討するために、入学後1ヶ月時と現在の最も親しい友人が同一人物であるか否かを学年ごとに集計した（表1）。もしも初期分化した親しい関係が長期にわたって維持されるのであれば、学年によらず同一人物の比率が高くなることが予想される。表1から、1年生では同一人物が72.7%であったが、3・4年生では別人物が63.2%を占めていた。入学後2年以上経過した3年生では、初期分化した関係が維持されず、親しい友人の交替が起こっていることが明らかにされた。

表1　入学後1ヶ月時と現在の親しい友人の一致・不一致

	入学後1ヶ月時と現在の親しい友人が		
	同一人物	別人物	計
1年生	64 (72.7)	24 (27.3)	88 (100.0)
3・4年生	25 (36.8)	43 (63.2)	68 (100.0)
計	89 (57.1)	67 (42.9)	156 (100.0)

（　）内は%

次に、入学1ヶ月時と現在で最も親しい友人が別の人物であった調査対象者について、その時期、理由などを検討した。関係が変化した時期の平均値は、1年生が入学後4.7ヶ月（SD ＝2.0）、3年生が13.9ヶ月（SD ＝7.7）で、それぞれ1年次の7～8月、2年次の4～5月であった。入学1ヶ月時に最も親しかった友人との現在の関係と、関係が変化した理由の集計結果を表2、表3にそれぞれ示す。表2から、3年生、1年生とも、現在の関係は「どちらかというと仲がよくない」、「ほとんど口をきかずお互いに無関心」が7割以上を占めており、あまり良好な関係ではないことがわかった。表3から、関係が変わった理由としては、3年生では「一緒の授業が少なくなるなど、顔を合わす機会が減ったから」の選択率が最も高く(58.1%)、次いで「より気の合う友人が出来たから」(23.3%)、「趣味や考えが自分とは違うと思ったから」(16.3%) が多かった。1年生でも同様に「一緒の授業が少なくなるなど、顔を合わす機会が減ったから」の選択率が最も高かったが、「なんとなく今のようになっていった」も同じ45.8%の選択率であった。3年生、1年生とも「顔を合わす機会が減った」という理由が多いことから、時間割の都合などの外的要因の影響で友人関係が変化していることが示された。1年生では「なんとなく」という理由も多いため、特にそ

表2　入学後1ヶ月時の親しい友人との関係が変化した場合の現在の関係

	1年生		3・4年生	
	人数	%	人数	%
どちらかというと仲がよくない	9	37.5	18	41.9
ほとんど口をきかず互いに無関心	10	41.7	13	30.2
あいさつをする程度で，どちらかというと疎遠	4	16.7	6	14.0
会えば話はするが，行動を共にしたりすることはない	1	4.2	5	11.6
一緒に遊んだり，行動したりする複数の友人の一人	0	0.0	1	2.3
親友というほどではないが親しい友人の一人	0	0.0	0	0.0
計	24	100.1	43	100.0

表3　入学後1ヶ月時の親しい友人との関係が変化した理由（複数選択可）

	1年生（n=24）		3・4年生（n=43）	
	人数	%	人数	%
顔を合わす機会が減った	11	45.8	25	58.1
より気の合う友人ができた	3	12.5	10	23.3
趣味や考えが違った	1	4.2	7	16.3
その他	4	16.7	7	16.3
なんとなく今のようになっていった	11	45.8	3	7.0
性格が合わなかった	3	12.5	2	4.7
相手から距離をとるようになった	0	0.0	2	4.7
けんかをした	0	0.0	0	0.0

の傾向が顕著だといえるが、3年生までには、趣味や考え方を考慮して、自分とより気の合う友人を主体的に選択していることがわかった。

親密な関係の初期分化の維持過程

初期分化した親密な関係が維持される過程を検討するために、初期分化の維持を基準変数とし、自己紹介の機会、入学後1ヶ月時点までの行動4領域（初期の共行動、コミュニケーション、相互支援、情愛）、入学後1ヶ月時点での親密度、入学後1ヶ月時点でのコミットメント（友人関係を維持したいか）、入学後1ヶ月時点に最も親しかった友人との現在の親密度の8変数を説明変数とするパス解析を行った。初期分化の維持は、入学後1ヶ月時点と現在の最も親しい友人が同一人物か別人物かを指標とし、同一人物の場合には初期分化維持、別人物の場合には非維持とした。1年生の結果が図2、3年生の結果が図3である。

図2に示した1年生の初期分化維持過程の特徴を述べる。入学1ヶ月後の親密度に対して、初期のコミュニケーションから直接の正の影響と、情愛を経由した正の影響、また相互支援、情愛を経由した正の影響がみられた。次に、現在の親密度に対しては、入学1ヶ月後の親密度から直接の正の影響と、コミットメントを経由しての正の影響がみられ、初期の相互支援から直接、負の影響がみられた。そして現在の親密度が初期分化の維持に正の影響を及ぼしていた。入学後1ヶ月までの相手とのコミュニケーションの多さが親密度を高め、それが直接現在（約7ヶ月後）の親密度を高めるか、または相手との関係を維持していきたいという意思を高めて、その結果現在の親密度が高まる。そして、現在の親密度が高い関係ほど維持

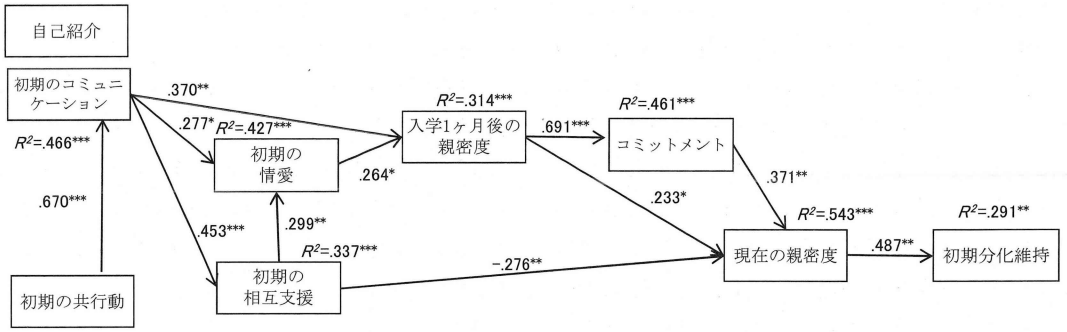

図2　初期分化の維持過程（1年生）　*p <.05, **p <.01, ***p <.001

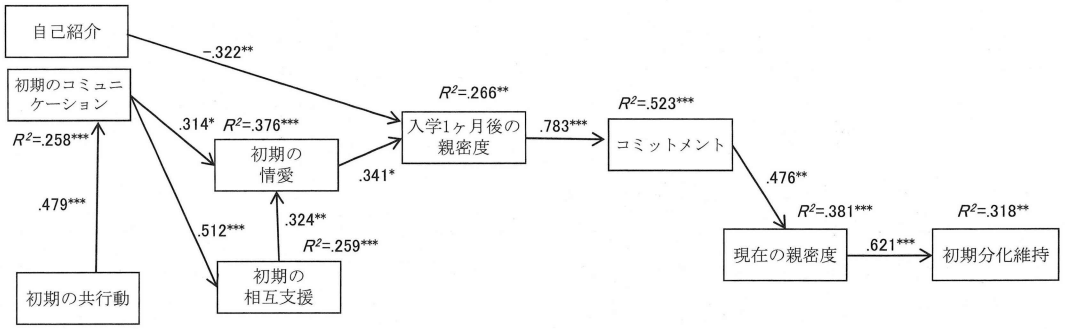

図3　初期分化の維持過程（3年生）　*p <.05, **p <.01, ***p <.001

されやすい。しかし、入学後1ヶ月までに、相手にサービスやサポートの提供を多くするほど現在の親密度が低下する。1年生では、入学1ヶ月後の親密度が、直接、間接に現在の親密度を規定し、それが初期分化の維持を規定していることが示された。また関係の初期において、相手に対するサービスやサポートの提供が多いとその関係は長続きしないことが示された。

次に図3に示した3年生の初期分化維持過程の特徴について述べる。入学1ヶ月後の親密度に対して、初期のコミュニケーションから情愛を経由しての正の影響と、相互支援、情愛を経由しての正の影響がみられた。また1年生ではみられなかった、自己紹介の機会の有無から負の影響がみられた。さらに現在の親密度に対しては、入学1ヶ月後の親密度からコミットメントを経由してのみ正の影響がみられ、1年生のように直接の影響は見られなかった。そして、現在の親密度が初期分化の維持に正の影響を及ぼしていた。

以上の特徴から、1年生と3年生の初期分化の維持過程には共通点が多いことがわかる。入学後1ヶ月までの行動や経験の共有がコミュニケーション行動を促進し、相手へのサービスやサポート、情緒的なつながりを表す行動が増し、それによって相手への親密度が高められる。そして入学後1ヶ月時点での親密度が高くなるほど、相手との関係を維持していきたいと思うようになり、それが現在の親密度を高め、初期分化の維持を促している、という過程である。

一方、1年生と3年生の相違点として、1年生

では、初期のコミュニケーションから入学1ヶ月後の親密度への正の影響、初期の相互支援から現在の親密度への直接の負の影響、入学後1ヶ月後の親密度から現在の親密度へ直接正の影響がみられたことと、3年生では、自己紹介の機会の有無から入学1ヶ月後の親密度への負の影響がみられた。中でも特に注目すべき結果は、入学1ヶ月後の親密度から現在の親密度への経路が1年生でのみ、みられたことである。1年生、3年生とも、入学1ヶ月後の親密度が高いとコミットメントが高まり、現在の親密度が高まるという影響がみられたが、1年生では、入学1ヶ月後の親密度が高いことによって、コミットメントを経由せずに現在の親密度が高まるという直接の影響がみられた。

考　察

本研究では、親密な関係の初期分化現象が生じていることを確認し、初期分化した友人関係が長期的に維持されるのか否か、維持を規定する要因が何かを明らかにすることを目的として、大学生1年生と3年生を対象に調査を行った。まず、1年生、3年生とも、入学後1ヶ月時点での親密度が高い群の方が低い群よりも現在の親密度が高いことが示された。このことは、現在の親密さが入学後1ヶ月時点での親密さによって規定されていることを示唆しており、関係性の初期分化現象が生じていることが確認できた。山中（1994）は、出会ってから2週間というかなり早い時期に初期分化現象が生じることを示している。本研究では山中（1994）よりもさらに時間の経過した、出会ってから1ヶ月時点に着目しているので、既に初期分化が生じた後の段階だと考えられる。

次に、初期分化した関係がどのくらい維持されるのかについて、入学後1ヶ月時点での最も親しい友人であった人物が、現在の親友と同一人物であるか否かを検討した。その結果、1年生では、同一人物が7割以上を占めたのに対して、入学後2年半以上経過した3年生では、別人物が6割以上を占め、親しい友人の交替が起こっていることが明らかになった。出会ってから2週間という早い時期に初期分化した親しい関係は、大学生活の進行にともなって変化していき、2年以上の長期に渡っては維持されにくいと考えられる。親しい友人が交替した理由についての集計結果（表2）から、1年生は、授業の時間割の都合などの外的要因の影響で「なんとなく」疎遠になっているのに対して、3年生には、それだけでなく「より気の合う友人が出来たから」、「趣味や考えが自分とは違うと思ったから」という理由も多く見られた。性格の類似性（e.g.,Hendrick & Brown, 1971；中村, 1984）や態度の類似性（Byrne & Nelson, 1965）は、共に対人魅力を高める効果を持つ要因であることがこれまでの研究で指摘されてきた。本研究では、調査対象者に同じ学科内の友人を想定してもらった。大学生活が進むにつれて、学科内の様々な人物と話をする機会が増えるし、特に3年生以上になると自分の進路や目標がより明確になってくるであろう。そうしたときに、新たに知り合った友人の方が自分と性格や態度が似ていることがわかれば、親密度が増して、より重要な友人へと変わっていくことが予想される。学生生活が進むつれ、単に顔を合わせる機会が多いというだけでなく、自分と友人との関係を吟味し、主体的に関係を変えていることが伺える。また本研究の結果から、親しい友人の交替が生じたときに、たとえ「なんとなく」という理由でも疎遠になった以前の友人とは、良好な関係を保つことが難しいことも示された。興味深い点であり、さらに検討が必要である

初期分化の維持過程と維持の規定因については、パス解析によって検討した。その結果、1年生、3年生に共通して、概ね以下のような維持過程が存在することが示唆された。まず、相手と行動や経験を共にすることによって、自己開示を含むコミュニケーション行動が促進され、それによって相手に対するサービスやサポート行動、情緒的な

つながりを表す行動がさらに増え、相手への親密感が高まる。相手と親密な関係が形成されると、それを維持しようというコミットメントが高まり、現在に至るまで親密感が維持され、その結果として初期分化した親密な友人関係が維持される。

1年生と3年生の違いの中で注目すべき点として、1年生では初期の親密度が現在の親密度を直接高めていたのに対して、3年生ではコミットメントが高まることによってのみ現在の親密度が高められていた。1年生の入学後1ヶ月と現在では、約7ヶ月の間が空いているが、この7ヶ月という期間は、初期の親密度が、特に維持を図らなくとも持続され得る程度の長さだと考えられる。その結果、1年生では初期分化の維持率が72.7%と高くなっているのだろう（表1）。それに対して3年生では約2年7ヶ月経過しており、ここまでの長期になると、意識的に維持しないと親密な関係を保ちにくいのである。

その他に、1年生では、初期のコミュニケーションから入学1ヶ月後の親密度への正の影響、初期の相互支援から現在の親密度への直接の負の影響がみられた。入学して間もない時期には、コミュニケーション行動の多さ、つまりたくさん話ができたかどうかが直接親密感を高める効果を持つことを表している。自己開示と親密さが相互規定的な関係にあることを示したAltman & Taylor（1973）の知見と合致した結果だといえる。また、入学1ヶ月後までに相手へのサポートやサービス行動を多くとっているほど現在の親密度が低下していた。サポートやサービスを多く提供する関係は、互いに気を遣い合っている関係である可能性もある。それが情緒的なつながりを強めればよいが、そうでない場合には結果的に親しい関係には発展しないのだと考えられる。ただし3年生までの長期には影響が及ばないのだろう。

3年生については、自己紹介の機会の有無から入学1ヶ月後の親密度への負の影響がみられた。これは、自己紹介を十分に詳しくするような状況は、授業の中などフォーマルな場合が多いため、そうした場で出会うよりも、偶然に席が隣になるなどで一緒になり、インフォーマルなコミュニケーションをとるようになった方が、親密感が高まる可能性が考えられる。インフォーマルなコミュニケーションの中での自己紹介は「自己紹介」と認識されにくいのかもしれない。本研究では、調査対象者にとって、入学後1ヶ月時点の友人関係を想起して回答してもらう形式をとったため、3年生では自己紹介をしたかどうかについて、フォーマルな場での自己紹介場面の方が想起されやすくなり、結果として3年生でのみ負の影響がみられた可能性もある。山中（1996）は、自己紹介の機会を、初期分化を促進する条件としてあげていたが、本研究では、影響を与えないか、むしろ親密化を阻害する可能性が示された。現時点では検討材料が乏しいため、自己紹介を含む出会い方が親密化過程にどのような影響を及ぼしているかについては今後の検討課題としたい。

本研究の結果から、初期分化した親密な関係の維持はコミットメントによって規定されており、コミットメントが高まるほど初期分化が維持されやすいことが示された。入学後1ヶ月時点での親しい友人との関係が3年生時まで維持されていた人たちは、関係維持のために労力を払っているのだろう。例えば、前述のように授業で一緒になることが少なくなって顔を合わす機会が減った場合でも、関係を途絶えさせないよう、連絡をしたり、会う機会を作ったりといった行動をとっていると推測される。一度親密性の確立された関係を維持することに失敗すると、それはすなわち関係の崩壊を意味する（中村,1996）。初期分化によって親密な関係が形成されたときに、短期間であれば高まった親密感がそのまま保たれるが、長期間にわたり親密な関係を維持するためには、維持のための行動をとるなどコストの投入が必要なのである。それを踏まえると、初期分化の維持過程をより明らかにするためには、初期に高まった親密感がコ

ミットメントを高める過程と、一度形成された親密な関係を維持するためにどのような行動が有効なのかという点を検討することが次の課題といえる。

最後に本研究の方法上の問題に言及したい。本研究では、入学後1ヶ月時点の友人関係についての質問において、調査対象者に過去を想起してもらう形式をとった。1年生については約半年ほど前のことだが、3年生にとっては2年半以上も前のことになるので、十分に想起できていない可能性、当時のことよりも現在に合わせた回答がなされた可能性があり得る。大学入学時から3年次、4年次までの縦断的調査によって本研究での知見を確認していくことが必要である。

引用文献

Altman, I. & Taylor, D.A. (1973). *Social Penetration.* New York ; Holt, Reinhart & Winston.

Berg, J. H. & McQuinn, R. D. (1986). Attraction and exchange in continuing and noncontinuing dating relationships. *Journal of personality and social psychology*, **50**, 942-952.

Byrne, D. & Nelson, D. (1965). Attraction as a linear function of proportion of posit ive reinforcements. *Journal of personality and social psychology*, **1**, 659-663.

Hendrick, C. & Brown, S.R. (1971). Introversion, extroversion, and interpersonal attraction. *Journal of personality and social psychology*, **20**, 31-36.

Jourard, S. M. (1971). *self disclosure : An experimental analysis of transparent self.* New York ; Wiley-Interscience.

Levinger, G. & Snoek, D. J. (1972). *Attraction in relationships : A new look at interpersonal attraction.* General Learning Press.

中村雅彦（1984）. 性格の類似性が対人魅力に及ぼす効果　実験社会心理学研究, **23**, 139-145.

中村雅彦（1996）. 対人関係の崩壊とその修復　長田雅喜（編）対人関係の社会心理学　福村出版　pp.110-120.

山中一英（1994）. 対人関係の親密化過程における関係性の初期分化現象に関する検討　実験社会心理学研究, **34**, 105-115.

山中一英（1996）. 友人関係の親密化過程　長田雅喜（編）対人関係の社会心理学　福村出版　pp.101-110.

和田実・廣岡秀一・林文俊（1986）. 大学生の交友関係の進展に関する研究 (1)　日本社会心理学会第27回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第34回大会発表論文集, 73-74.

渡邉舞・今川民雄（2008）. 大学新入生の新旧友人関係に関する追跡的研究 (3)　日本心理学会第72回大会発表論文集, 126.

付　記

1）本研究は阿久津真弓さんが十文字学園女子大学人間生活学部に提出した卒業論文（2008）のデータを再分析したものである。

2）本研究は日本社会心理学会第50回大会・日本グループ・ダイナミックス学会第56回大会合同大会（2009）において発表した。